

労働映画百選通信 No.08 2016.05

発行 ■ NPO法人 働く文化ネット 編集 ■ 清水浩之 〒101-0062 千代田区神田駿河台3-2-11 連合会館5F

遂に決定!

『日本の労働映画百選』

いよいよ発表!

記念シンポジウムと映画上映会を開催!

映画は日本の仕事と暮らし、働く人たちの悩みと希望、働くことの意義と喜びをどのように描いてきたのか。働くことの今とこれからについて考えるために、一世紀余の映画史の中から日本の労働映画百本を選びました。記念シンポジウム・映画上映会を下記のとおり開催します。ぜひご参加ください。

日時: 2016年 6月 11日(土) 13:30~17:15 参加費無料・申込不要

場所: 連合会館 2階大ホール (地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)

《主催・お問い合わせ先》NPO法人 働く文化ネット info@hatarakubunka.net

【プログラム】

13:30~13:45 主催者代表あいさつ ご来賓あいさつ

13:45~15:15 **パネルディスカッション「日本の労働映画の一世紀」**

《パネリスト》井坂能行(岩波映像顧問) 篠田 徹(早稲田大学教授)

佐藤 洋(共立女子大学講師) 清水浩之(映画祭コーディネーター)

《司会》鈴木不二一(働く文化ネット理事)

15:15~15:30 休憩

15:30~17:15 **映画上映『にあんちゃん』**

1959年/101分 製作/日活 監督/今村昌平 出演/長門裕之、松尾嘉代

九州の小さな炭鉱町を舞台に、両親を亡くした4人兄妹が懸命に生きる姿を、重厚なリアリズムで描く。

17:15 閉会

労働映画 スペシャルサイト <http://hatarakubunka.net/>



【上映情報】労働映画列島! 5~6月 ※《労働映画列島》で検索! <http://d.hatena.ne.jp/shimizu4310/00160503>

◎新作ロードショー

鏡は嘘をつかない 《6月4日(土)から 東京 神保町 岩波ホールで公開、全国で順次公開》

インドネシアの南東、海の民・バジョ族が暮らす美しい珊瑚礁の島を舞台に、漁に出たまま戻らない夫を待ち続ける妻と娘を描いたドラマ。(2011年 インドネシア 監督/カミラ・アンディニ) <http://www.pioniwa.com/kagamimovie/>

ニツ星の料理人 《6月11日(土)から 東京 角川シネマ有楽町ほかで公開》

ブラッドリー・クーパー主演最新作。一流の腕を持ちながらトラブルで転落したシェフが、新天地ロンドンで、ミシュランガイドの「ニツ星」獲得を目指して奮闘する。(2016年 アメリカ 監督/ジョン・ウェルズ) <http://futatsuboshi-chef.jp/>

さとにきたらええやん 《6月11日(土)から 東京 ポレポレ東中野ほかで公開》

“日雇い労働者の街”と呼ばれてきた大阪・釜ヶ崎にあるミニ児童館「こどもの里」。ここで育つ子どもたちと、彼らを見守る大人たちを描いたドキュメンタリー。(2016年 日本 監督/重江良樹) <http://www.sato-eeyan.com/>

◎名画座・特集上映

【東京 池袋 新文芸坐】5/16~6/2「成瀬巳喜男 静かなる、永遠の輝き」…腰弁頑張れ/おかあさん/流れる/他

【東京 シネマヴェール渋谷】5/21~6/17「開館10周年記念特集II」…現代人/血槍富士/七人の刑事 終着駅の女/他

【東京 早稲田松竹】5/28~6/3「今村昌平監督特集」…赤い殺意/豚と軍艦/楡山節考/うなぎ/他

【東京 東銀座 東劇】6/11~24「俳優・瀧美清の軌跡」…拜啓天皇陛下様/あゝ声なき友/友情/喜劇 急行列車/他

【東京 ラピュタ阿佐ヶ谷】6/12~8/13「脚本家・井手俊郎特集」…警察日記/青い山脈/大出世物語/おふくろ/他

【川崎市市民ミュージアム】6/4~18「社会派エンタテイメント」…女ひとり大地を行く/狼/遊びの時間は終らない/他

【彩の国さいたま芸術劇場】5/26~29 彩の国シネマスタジオ『パレードへようこそ』(2014年 イギリス)

【札幌シネマフロンティアほか 全国55館】6/11~7/8「午前十時の映画祭」…ハリートント/午後の遺言状

【秋田 週末名画座シネマパレ】5/27~6/5『名もなく貧しく美しく』(1961年 監督/松山善三) 他

【大阪 九条 シネ・ヌーヴォ】5/28~7/1「女優・岡田茉莉子」…あすなる物語/青い果実/ある落日/他

【尼崎 塚口サンサン劇場】6/4~24「塚口旅情~思い出しておくれ森繁節を。」…三等重役/社長太平記/駅前旅館

【小倉昭和館】5/14~27「追悼 女優 原節子特集」…お嬢さん乾杯! /智恵子抄/娘・妻・母/他

【テーマ研究】#8 《炭鉱に生きる人々》 資料作成:波多楽久

日本の労働映画の歴史を辿るとき、縦軸には「時代」があり、横軸には様々な職業や仕事の形態、労働の意義や現場の課題など、多岐にわたる「テーマ」が広がっている。この欄は、テーマごとに関連する作品を発掘していく試みである。

今月は《炭鉱に生きる人々》を描いた作品を、時代ごとに集めてみた。戦中には軍需としての石炭増産が求められ、戦後は経済復興策として「傾斜生産方式」が実行された時代、各地の炭鉱は労働者でにぎわい、北海道・夕張市では昭和26～39年の間、人口が10万人を超えていた(現在は1万人)。基幹エネルギーが石油に転換され、閉山の相次いだ頃からは、それぞれの地元テレビ局が炭鉱の行く末を追う番組を送り出していく。近年は、炭鉱で働いた人々の歴史と文化をあらためて見つめ直す作品が相次いで登場した。こうして時代順に続けて見てみる機会があると、面白いと思う。

ジャンル:【劇】劇映画【記】ドキュメンタリー【短】短編映画【TV】テレビ番組/ソフト:【DVD】【VIDEO】/フィルムライブラリー:【NFC】フィルムセンター【多摩】都立多摩図書館/映像ライブラリー:【NHK】各局の公開ライブラリーで閲覧可能【放L】放送ライブラリー(横浜)で閲覧可能

- 【劇】女鉱夫(1915) 日活向島 監督/細山喜代松
- 【劇】鉱山(1940) 福岡地方礦業報國聯合会【監】三澤成光 鉱山労働者が産業報國に邁進するようにと説く劇映画。
- 【劇】激流(1944) 松竹大船【監】家城巳代治【出】小澤栄太郎 若い鉱山技術者を主人公に、石炭増産を描く国策映画。
- 【記】炭坑(1947) 日映【監】伊東寿恵男、柳澤寿男 戦後の悪条件の中で奮闘する北海道・美唄炭坑の人々。
- 【劇】緑なき島(1948) 松竹京都【監】小坂哲人【出】佐野周二、山村聰 長崎・端島(軍艦島)が舞台。2人の男が労働組合の選挙で闘う。
- 【劇】女ひとり大地を行く(1953) キヌタプロ【監】亀井文夫【出】山田五十鈴【DVD】 戦前からの20年をわたり、炭鉱で働いた女性の一代記。炭炭北海道地方支部がカンパで制作費300万円を提供した。
- 【劇】浮草日記(1955) 山本プロ=俳優座【監】山本薩夫【出】東野英治郎【DVD】 旅回りの一座が炭鉱町で労組のストに巻き込まれるが、組合員と家族を鼓舞する「ストライキ劇」を上演し成功する。
- 【TV】どたんば(1956) NHK【NHK】【DVD】 【演】永山弘【脚】菊島隆三【出】三國連太郎、加東大介 炭鉱の落盤事故で生き埋めにされた作業員たちと、救出を待つ家族や経営者たちを描いた生放送ドラマ。
- 【劇】どたんば(1957) 東映東京【監】内田吐夢【脚】橋本忍【出】加藤嘉、志村喬【NFC】 上記ドラマを映画化。朝鮮人労働者への差別も描かれる。
- 【短】ボタ山の絵日記(1957) 共同映画【監】徳永瑞夫 筑豊の炭鉱地帯で暮らす生活困窮児を描くセミドキュメンタリー。
- 【記】黒い炎(1958) 大映東京【監】西村元男 北炭夕張の企業PR映画。石炭の採炭工程や化学処理を紹介。
- 【TV】日本の素顔 ボタ山のかげに 中小炭鉱(1958)【NHK】 景気変動に揺らぐ長崎・崎戸島の中小炭鉱を訪ねる。
- 【劇】にあんちゃん(1959) 日活【監】今村昌平【出】長門裕之、松尾嘉代【DVD】
- 【TV】黒い羽根運動によせて(1959) RKB毎日【放L】 炭鉱失業者の生活を助ける「黒い羽根」募金活動の記録。
- 【劇】筑豊の子どもたち(1960) 東宝=日映新社【監】内川清一郎【脚】菊島隆三【出】加東大介 土門拳の写真集を映画化。炭坑失業者とその子供たちの暮らし。
- 【記】三池 たたかう仲間心はひとつ(1960) 共同映画【企画】三池斗争現地指導委員会【監】徳永瑞夫 1959年8月から60年7月までの三井三池水争議闘争の記録。
- 【劇】おとし穴(1962) 勅使河原プロ=ATG【DVD】 監督/勅使河原宏 脚本/安部公房 出演/井川比佐志 不況の北九州炭鉱地帯。第二組合長と間違われて殺された男が幽霊となってさまよい続ける不条理劇。
- 【TV】ある死者の日記(1964) 九州朝日放送【放L】 1963年の三井三池炭じん爆発事故で死亡した男性の日記。
- 【TV】組夫(1965) テレビ西日本【放L】 福岡・山野炭坑で起こったガス爆発事故。死者237名の約半数は“組夫”と呼ばれる下請けの坑夫たちだった。
- 【TV】坑道 片隅の100年(1966) NHK【NHK】 筑豊の閉山した炭鉱での危険な坑道解体作業を追う。

- 【TV】ある人生 ぼた山よ…(1967)【演】工藤敏樹【NHK】 60歳を過ぎて絵筆をとった山本作兵衛さんが描く炭鉱の生活史。
- 【TV】人間列島 みちのくの椰子の葉陰で(1971)【NHK】 いわき・常磐炭鉱がレジャー施設となり、娘たちはフラガールに。
- 【TV】友子儀式(1973) NHK【NHK】 江戸時代初期から続いていた古いきまり、炭鉱夫同士が親子・子分の義理を結ぶ「友子制度」を、夕張・真谷地炭鉱で再現。
- 【TV】まっくら(1973) RKB毎日【演】木村栄文【出】常田富士男、白石加代子 筑豊の坑夫とその家族の歴史を、虚実入り交じった物語で展開。
- 【劇】青春の門(1975) 東宝映画【監】浦山桐郎【脚】早坂暁【出】仲代達矢、吉永小百合、田中健【DVD】 五木寛之の小説を映画化。炭鉱事故で父を亡くした少年が、養母や周囲の人々に支えられ成長していく。
- 【TV】地底の葬列(1982) 北海道放送【演】田畑智博ほか 北炭夕張炭鉱の閉山までの経過と、繰り返された事故の歴史。
- 【TV】風の骨 45年目の中国人強制連行事件(1990) 秋田放送【放L】 終戦間際、強制連行された中国人が虐殺された「花岡事件」を、生存者の証言から掘り起こす。
- 【記】海底炭鉱に生きる 池島からの報告(1983) RKB映画社【企画】松島炭鉱【監】野崎健輔【多摩】 海面下に切羽のある池島炭鉱(2001年閉山)の稼働時の様子。
- 【劇】三たびの海峽(1995)「三たびの海峽」製作委員会【監】神山征二郎【出】三國連太郎、南野陽子【DVD】 篠木蓬生の小説を映画化。日本に強制連行され、炭鉱で働いた過去を持つ朝鮮人男性の半生を描く大河ロマン。
- 【TV】人間劇場 消えゆくカンテラの灯(1995) テレビ東京=国際放映【演】森弘太【放L】 5歳から炭鉱で働いてきた女性の手紙で綴る、女3代の軌跡。
- 【記】闇を掘る(2001) 森の映画社【監】藤本幸久 北海道のヤマに生きた人々の現在と、それぞれの人生をたどる。
- 【TV】炭坑美人 闇を灯す女たち(2002) RKB毎日【放L】 筑豊で働いてきた女性たちが語る、石炭産業史の裏表。
- 【記】炭鉱(ヤマ)に生きる(2004) モンタージュ【監】萩原吉弘【DVD】 元炭鉱夫・山本作兵衛さんが描いた「筑豊炭坑絵巻」を映像化。
- 【劇】フラガール(2006) シネカノン【監】李相日【出】松雪泰子、蒼井優【DVD】 1965年、炭坑の閉山に揺れるいわきで、再生を期して誕生したレジャー施設「常磐ハワイアンセンター」の実話を映画化。
- 【記】三池 終わらない炭鉱(やま)の物語(2006) シグロほか【企画】大牟田市石炭産業科学館【監】熊谷博子【DVD】 三池炭鉱の150年以上の歴史に、「負の遺産」も含め向き合う。
- 【TV】石炭奇想曲 夕張、東京、そしてベトナム(2007) 北海道文化放送【放L】 夕張から消えた石炭産業のその後を追って、ベトナムで炭鉱の開発に携わっている日本人技術者たちへと辿り着く。
- 【劇】信さん 炭坑町のセレーナーデ(2010) フェローピクチャーズ【監】平山秀幸【出】小雪、池松壮亮【DVD】 昭和30年代、福岡の炭鉱町で貧しくも明るく生きる人々の日常。

※このリストを引用する時には【労働映画百選より】と付記いただきますよう、お願いします。

【作品ガイド】『にあんちゃん』

1959年/111分 製作/日活 監督/今村昌平 原作/安本末子 脚色/今村昌平、池田一郎(隆慶一郎)
 撮影/姫田真左久 美術/中村公彦 録音/橋本文雄 音楽/黛敏郎 助監督/浦山桐郎

貧困を生き抜く強さに圧倒される

文: 芹生琢也 (働く文化ネット)

佐賀県の西端、東松浦郡入野村。その東海岸に杵島炭鉱大鶴鉱業所という小さな炭鉱があった。海岸から続く急斜面に並ぶ炭鉱住宅に住んでいた4人のきょうだいの末っ子、安本末子が小学校3年から5年までつけていた日記が1958年、光文社カッパブックスとして出版され、ベストセラーになった。これを原作に、今村昌平がメガホンを取り映画化した。

時代は朝鮮戦争後の不況下、石炭から石油へのエネルギー革命という背景もあり、石炭産業はどん底の時代。代表的な大山でさえ赤字に苦しみ、中小炭鉱に至っては当時200以上が廃坑、失業者が溢れた。こんな中で一家の父親が死ぬ。長兄も炭鉱で臨時雇いとして働いていたが、父の死後にも「入籍」(本雇になること)を拒否される。朝鮮人だからだ。第2次大戦中、国策により多数の朝鮮人が強制連行され、炭鉱等で働かされていた。終戦後、多くは帰国したが、一部は日本に残る。主人公の家族もそのような「在日」一家だった。だが貧しいのは彼らだけではない。会社は赤字続きで、労働者に支払われる給料の半ばは現金でなく、こっぴで通用する金券、それも遅欠配。労働組合も力強きたたかうが、会社は人員整理に踏み切り、臨時身分の長兄がその対象に。働き手を失った4人のきょうだいはどん底の貧困に襲われる。そんな中でもへこたれることなく強く生きるきょうだい。



[DVD] ジェネオン

物語は末子の視点で描かれる。だからか、朝鮮人であることはあまり強調されない。しかしその境遇は大いに朝鮮人であることから来ている。押しつぶされそうになりながらも、生き抜く。その強さには圧倒される。

「私は一日も早く小学校を卒業したいです。…私は何でもいいから自分で働いて、あんちゃんたちを助けて、4人そろって暮らせるようにしたくてたまりません」という末子。にあんちゃん(二番目の兄)の高一は「ここは貧乏すぎてどうしようもなか」と東京へ向かうが、家出人として追い返される。帰ってきた高一と末子が手を取り合っただけのラストシーンは、二人の将来を暗示して感動的だ。

映画を離れて現実を目をやると、その後の経済成長の中で多くの日本人は貧困から徐々に抜け出す。だが朝鮮人は絶対的窮乏から抜け出せず、「祖国帰還」に夢を託す。(今村が脚本、浦山が監督した『キューボラのある街』1962はこれをテーマとしている)。安本きょうだいの場合は「にあんちゃん」の印税で一息つき、「祖国帰還」で幻滅を味わうことなく、「在日」を生きることになる。(後に末子は早稲田大学を卒業、高一も慶応大学に進学する。)

なおこの作品で今村昌平は文部大臣賞を受けるが、受賞について「健全な映画を撮ったことを反省している」と語っている。

【参考文献】安本末子『にあんちゃん』光文社カッパブックス(1958年/絶版)
 (何度か復刊されているが、現在入手可能なものとしては2010年角川文庫版がある)

東京 早稲田松竹で5/28(土)~6/3(金)「生誕90年・没後10年 今村昌平監督特集」…赤い殺意(1964)豚と軍艦(1960)神々の深き欲望(1968) 檜山節考(1983) うなぎ(1997) 復讐するは我にあり(1979)の6作品。http://www.wasedashochiku.co.jp/

『日本の労働映画百選』記念シンポジウムと映画上映会

6月11日(土)13:30~17:15

参加費無料・申込不要

場所:連合会館 2階大ホール
 (地下鉄 新御茶ノ水駅 B3出口すぐ)

《主催・お問い合わせ先》
 NPO法人 働く文化ネット
 info@hatarakubunka.net

【プログラム】

13:30~13:45 主催者代表あいさつ ご来賓あいさつ

13:45~15:15 **パネルディスカッション「日本の労働映画の一世紀」**

《パネリスト》井坂能行(岩波映像顧問) 篠田 徹(早稲田大学教授)

佐藤 洋(共立女子大学講師) 清水浩之(映画祭コーディネーター)

《司会》鈴木不二一(働く文化ネット理事)

15:15~15:30 休憩

15:30~17:15 **映画上映『にあんちゃん』**

1959年/101分 製作/日活 監督/今村昌平 出演/長門裕之、松尾嘉代

九州の小さな炭鉱町を舞台に、両親を亡くした4人兄妹が懸命に生きる姿を、重厚なりアリズムで描く。

17:15 閉会

【労働映画のスターたち】第8回「安藤サクラと黒木華」 文:百永良武

絶好調の若者群像ドラマを引っ張る「昭和顔」のヒロイン

今年4月にスタートした各局の連続ドラマは、いつも以上に面白い番組が多い。第1回を「お試し」のつもりで見てみたら、予想外に面白い…ということが相次いで、いつのまにか週に数本のドラマを見る状態になっている。労働映画百選的な視点(?)で見てみると、『99.9 刑事専門弁護士』(TBS)の松本潤、『世界一難しい恋』(日テレ)のホテル経営者・大野智といったヤング・エグゼクティブの“美しさ”も魅力的だが、一方で中谷美紀扮するアラフォー女医が涙と笑いの婚活騒動を巻き起こす『私 結婚できないんじゃないんです』(TBS)や、満島ひかりが若き日の黒柳徹子になりきり、テレビ草創期のラビリンスを駆け巡る『トットてれび』(NHK)など、個性的でチャームアップなヒロインが活躍するドラマが並んだことは、作り手のモチベーションや視聴者の期待が生んだ現象だと思う(雑誌「暮しの手帖」の創始者・大橋鎮子をモデルとしたNHKの朝ドラ、高畑充希主演の『とと姉ちゃん』は半年の長丁場なので、なるべく早く「戦後編」になってほしいところだが…)。

「男は美しく、女は明るく」…そんな流れの中でも特に目立っているのが、ともに連続ドラマでは初のヒロイン役を務める、『重版出来!』(TBS)の黒木華(はる)と、『ゆとりですがなにか』(日テレ)の安藤サクラだ。黒木は既に映画『小さいうち』(2014、監督・山田洋次)でベルリン国際映画祭最優秀女優賞(銀熊賞)を受賞したし、安藤も『かぞくのくに』(2012、ヤン・ヨンヒ)でキネマ旬報、『百円の恋』(2014、武正晴)で日本アカデミー賞の最優秀主演女優賞に輝いている。映画界のトップスター2人が起用されたのは、彼女たちの存在感と演技力が求められたからだと思うが、起用した作り手たちの姿勢にも、今まで以上のリアリティを確保しようとする意気込みを感じる。

『重版出来!』は、松田奈緒子のマンガが原作。大学時代に女子柔道選手だった主人公・黒沢心が、コミック週刊誌の編集部就職し、マンガ家と編集者との人間関係や、営業部や書店で繰り広げられる販売促進活動など、「マンガ産業」の舞台裏を体験していく。意外と知られていない出版業界の仕事を、ヒロインと視聴者が一緒になって学んでいける展開で、各回に登場するマンガの原稿を、作風の近い「本物の」マンガ家へ書き下ろしてもらった趣向は、ドラマ全体のリアリティを支える重要なアイテムになっている(番組ホームページで読めるようにしてあるのも嬉しい)。

原作のヒロインは小柄な体育会系女子だったが、ドラマの黒木は「背筋の伸びたお嬢さん」のイメージでさわやかな存在感を作り出している。新刊本の紙の匂いを思いっきり嗅いでみたり、上司に叱られてぺこちゃんみたいに舌を出したり…と、これまでの出演作ではあまり印象に残らなかった「朗らかさ」が全面に出ている。『真田丸』などの時代劇に違和感なくおさまリ、ネットでは「昭和顔」(!)と評された彼女の、新たな魅力が発揮されたと思う。

「クドカン」こと宮藤官九郎のオリジナルシナリオ『ゆとりですがなにか』は、1987年生まれ・29歳になった「ゆとり教育」第一世代の男女が、現代日本の競争社会に翻弄されながらも少しずつ成長していく青春群像劇。クドカンは“自身初の社会派ドラマ”と述べているが、彼の作品は『木更津キャッツアイ』(2002)や『あまちゃん』(2013)など、笑いの洪水の中に社会問題を巧みに取り入れて、絶妙なリアリティを作り出すことに特徴があり、ある意味「ふざけた山田太一」の域に達していると思う。今回は、素直でチャームアップだが「カッコイイ」とはいえない日々を生きる男3人(飲食店チェーン社員の岡田将生、小学校教諭の松坂桃李、東大受験11浪中の柳楽優弥)が偶然出会い、交流を深めていく21世紀版『ふぞろいの林檎たち』。「ちゃんと叱られたことがない」世代が、今や下の世代を叱らなくてはならない現実を、笑いで包みながら問題提起する。

安藤サクラが演じる宮下茜は、主人公・坂間(岡田)の同期入社仲間でも恋人、でも現在は彼が勤務する店のエリアマネージャー(つまり上司)という役どころ。職場では(必要以上に)厳しく接し、でも2人きりの時間では恋人らしく甘え…というカメレオンぶりが最高に可笑しい。現実の職場環境でも、30代前後の世代では女性がリーダー格、男性はアシスタント的存在…という構図をよく見かけるので、交際していることを職場の同僚には知られたくない、知られた途端に「ははーん」という目で見られるから……という彼女の心情も大いに頷ける(彼は複雑な心境だろう)。現在第4回が放送されたところで、これからは職場での昇進や、結婚・出産など様々な問題が描かれていくと思う。次の放送が待ち遠しい!



『重版出来!』
TBS系 火曜 夜10:00~



新米編集者・黒沢心
(黒木華-くろき-はる-)



『ゆとりですがなにか』
日テレ系 日曜 夜10:30~



エリアマネージャー・宮下茜
(安藤サクラ)